

アメリカにおける多文化主義とその限界

野村達朗

1 序論

筆者はこれまで長いことアメリカ史を労働者階級の歴史を中心に研究してきた。現代を含めてアメリカ史上の色々な時期を扱ったが、中心的な時期は20世紀初頭であった。当時のアメリカは驚くべき比率の外国系人口を抱えていた。1910年には外国生まれが14.5%、その移民二世が20.5%であった。統計上、移民とアメリカで生まれた第二世代を合わせて「外国系」(foreign-stock)というが、その合計は35.1%に及んだ。総人口の3分の1以上が外国系であった。一体これで一つの「国民国家」としてなりたつのかどうか、心配になるような比率だったのである。

当時の大都市は「移民都市」だった。1910年外国系人口の比率はニューヨークで78.6%だった。ニューヨークが例外だったのではない。外国系の比率はシカゴ77.5%、デトロイト74.0%、クリーヴランド74.8%、ボストン74.2%といった具合であり、当然アメリカの産業労働者階級の大半は外国系から構成されていた。したがって労働者階級史と移民史は密接に結びついていた。そこで私は労働史と移民史を結びつけて研究する必要を主張し、移民史、エスニック史をも研究するようになり、『「民族」で読むアメリカ』(講談社現代新書、1992)を出すことになり、また労働史と移民史を結びつけた作品として『ユダヤ移民のニューヨーク』(山川出版社、1995)を出した。ロナルド・タカキ著『多文化社会アメリカの歴史』(富田虎男監訳、明石書店、1995)が翻訳されたが、この本のユダヤ移民を扱った第11章は私の本の内容と非常に似ているのである。

さて今から20数年前にエスニック・リヴァイヴァルが起こり、文化的多元論(cultural pluralism)が風靡し、「サラダ・ボウル」という比喩が用いられた。ところで今再びエスニシティが注目を浴びるようになった。それはアメリカのエスニック状況に大きな変化が生じているからである。合法・非合法合わせて百数十万の移民が毎年流入するようになり、しかもその大部分がアジア系・ヒスパニック系である。現代のこの新しい移民をここでは「新新移民」と呼ぶことにしたい。歴史的には19世紀末～20世紀初頭に大流入した南・東ヨーロッパからの移民が

「新移民」と呼ばれたので、これと区別するためである。この「新新移民」の大流入により合衆国の人口構成が大きく変わりつつある。1990年の統計では外国生まれ移民が2,120万人で総人口の9%、移民二世が11%で、外国系合計は20%に及ぶ。総人口のうちヨーロッパ系白人は75%になり、有色マイノリティ人口は黒人12%、ヒスパニック9%、アジア系3%、インディアン1%であり、人口の4分の1がこのような有色マイノリティなのである。21世紀のある時点にはヨーロッパ系白人が人口の半分以下になるだろうと予測されている。すでに今日、都市におけるヨーロッパ系白人の比率はニューヨーク市で43%、ロサンゼルスで38%になっているのである。

このようなエスニック状況の変化に対応して、文化的多元論に代わって「多文化主義」(multiculturalism)という言葉が盛んに用いられるようになった。私が『「民族」で読むアメリカ』を執筆していた1991年ごろには、この言葉は聞かれるようになってはいたが、その内容がよく分からず、私は著書の中でこの言葉を用いなかった。94年のアメリカ学会の年次大会でのシンポジウム「アメリカン・エスニシティ」で報告して頂いた古矢旬氏によると、この言葉はアメリカでは1989年以降使用されるようになった新しい言葉であり、ニューヨーク・タイムズとワシントン・ポストの事項検索で調べると、1990年には十数件しかないが、1991年以降には200件以上出てくるようになるそうである。その訳語は一般には「多文化主義」であるが、「文化多元主義」という訳語が用いられることもある。ただしこれでは「カルチュラル・プルーラリズム」と同じになってしまうので、ここでは「多文化主義」という言葉を用いることにする。

多文化主義の定義としては『世界民族問題事典』(平凡社、1995年)に載せられている梶田孝道氏の定義から引用してみよう。「多文化主義とは、一つの社会の内部において複数の文化の共存を是とし、文化の共存がもたらすプラス面を積極的に評価しようとする主張ないし運動をさす」というのである。アメリカ史研究会では多文化主義の問題に強い関心を寄せ、『アメリカ史研究』第19号(1996)を「多文化主義とマイノリティ集団」の特集号とし、次のような趣旨説明を行なっている。「多文化主義がめざすものは、マイノリティ集団に属する個人が、各々の属性を保ちながら、差別を被ることなくそれぞれの才能や資質を十分に発達させることが可能で、かつ誰もが相互の差異を承認しつつ多様な生活様

式を維持することが可能な社会とされている」というのである。

この多文化主義という言葉の用法はかなり曖昧な面があり、女性や労働者階級など、クラス・ジェンダー・エスニシティという「社会史」研究の3つの基本要素の全てを含めて用いる場合があるが、ここではエスニックの集団的多元論という意味で用いることにしよう。また多文化主義についてはその世界観、歴史観からみた本質論、近代国家との関係、冷戦終結との関連、世界経済のボーダーレス化との関連など、「なぜ今、民族なのか」という難解な問題があるが、今ここでは、これらについて論じる用意がないことをお断わりせねばならない。

では多文化主義はかつての文化的多元論と同じものなのだろうか、違うものなのだろうか。前のアメリカのアメリカ学会の会長だったキャシー・デイヴィッドソン氏に伺ったところ、違いはないという返事であった。ところがロナルド・タカキ氏に聞いたところ違うという答えだった。同じ意味で用いる学者もあるが、ここでは違うニュアンスのものとして取り扱うことにする。多文化主義の問題について私に非常に役立ったのは、*Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.530 (November 1993) の特集号「岐路にたつアメリカ・プルーラリズムにおけるマイノリティ間問題」であり、とくにロナルド・タカキの論文“Multiculturalism: Battleground or Meeting Ground?”であった。

これらの文献を参考にして考えてみると、文化的多元論ではアメリカにやってくる多様な人種・民族集団はそれぞれの文化的伝統を保持しながらも、アメリカ合衆国の民主的な政治制度・社会制度を支持し、共通の言語として英語を用い、独立宣言に表明されたアメリカ共通の理念で味つけされねばならないと主張される。すなわち文化的多元論は統合の方向性を持っており、イギリス系、広くはヨーロッパ系白人が形成した主流文化がアメリカ文化の根幹を形成するということは否定されていないというのである。その好例としてタカキ氏はダイアン・ラヴィッチという学者の場合を挙げている。この人はコロンビア大学の教育学部の教授で、ブッシュ政権の教育次官をやった学者であるが、彼女はエスニックな多元論に立ちながらも、アメリカの国民的分裂を恐れており、アメリカの国民的統一性の重要性を強調し、色々な集団の文化をそれに次々に付け加えることによってアメリカの主流の文化を拡大するという考え方をしているというのである。つまりマイノリティが集団的紐帯を放棄して個人になることを欲しているというのである。

これに対して多文化主義はそのような統合への方向性を否定して、合衆国がそれぞれの文化を維持する多様な集団からなる社会であるべきだということを主張しているということになる。移民史についていえば、アメリカ社会は独立した個々の市民の自由・平等を前提とした社会であり、移民はアメリカにやってきて、個人として同化していくものだというのが従来の考えであった。文化的多元論もやはりこのような考えに立っていた。これに対して、多文化主義はアメリカが個人からではなく、それぞれの文化を維持する多様な集団からなる国であるべきだという議論を展開する。これは近代国家の典型としてのアメリカ合衆国の成立の根底をゆるがすような議論である。アメリカとは多様なエスニック集団により構成されているという議論は、アメリカの内部に多様なエスニック集団が存在しているという考えとは全く異なる議論である。

そもそもアメリカにおける「民族集団」(エスニック・グループ)、とりわけ移民系集団は、いわゆる「民族」とは違い、長い期間にわたって一定の地域に根ざして生活して、それぞれ民族国家やそれに準じる自治領の担い手となるような意味での民族ではないと私たちは説明してきた。したがってアメリカを集団からなる国家だと主張する多文化主義とは、アメリカのエスニック集団が「民族」になりたいと自己主張しているのだということも出来るわけである。

第二に以前の文化的多元論は主としてホワイト・エスニック、つまりアイルランド系と南・東ヨーロッパ系「新移民」の子孫たちが、ブラック・パワーに触発されて起こした自己主張であった。この点については拙著『「民族」で読むアメリカ』でかなり詳しく説明した。これに対して多文化主義は主として有色マイノリティ、特に黒人側の自己主張であるということが出来るように思われる。

多文化主義は特にアメリカの歴史教育の場合、従来無視されてきた諸集団(黒人、先住民、移民系諸集団、女性、同性愛者など)の観点を取り入れてアメリカ史を見なおそうとする立場としてきわめて活発化した。とりわけ大学ではカリキュラムと人事採用をめぐる「文化戦争」が戦われているのである。ロナルド・タカキによれば、「マイノリティの学生と学者はカリキュラムを多様化するために戦っており、他方保守派はキャンパスを取り戻すために戦っている。これこそがアラン・ブルームが『アメリカン・マインドの終焉』で提起した問題なのである。」

それとともに「同化」(assimilation)の概念が大変に不評となり、アメリカ

のマイノリティ集団はアメリカ社会に同化しないのだという考えも強くなってきた。ネイサン・グレイザーは自分が教えているハーヴァード大学の学生グループの態度を調査してみると、大きな多数派が否定的な反応を示した。グレイザーは「我々は新しい現実とともに生きているのである」として、多文化主義に反対する者、「完全な同化の真の唱道者はアメリカの公的・知的な生活において極めて少数に過ぎない」と述べている。そして有色マイノリティが社会にとけこもうとせず、アメリカは集団からなる国だと強く自己主張すれば、アメリカ社会はすっかり変わってしまい、分裂するのではないのかと心配する声が聞かれるようになってきた。とりわけ有色マイノリティの人口増加と自己主張の高まりの中で、白人側に危機感が生じている。それを代表しているのが、シュレジンガーの『アメリカの分裂』（岩波書店）という本である。

日本でも新聞などで、ハワイ人の主権回復運動、インディアンの主権と独立の要求、ヒスパニックの進出を挙げながら、多文化主義がアメリカ全体を覆っており、「アメリカは民族を融合する『るつぼ』であることを止めた。次の世紀には南北戦争以来はじめて本来の国のかたちを問う民族の難問題に当面することであろう」といった報道がなされる。アメリカではポーランド系はポーランド系で、イタリア系はイタリア系で、黒人は黒人で、メキシコ系はメキシコ系で、キューバ系はキューバ系で団結し、アメリカ社会はまさにモザイク状況を呈しており、人々は融合せず、統一は失われたといった印象を抱かせるような報道も見られるのである。

しかしアメリカは本当に分裂するのだろうか？ このことを考えるために、多文化主義をとりまく状況について冷静に全体的スケッチを描いてみようというのが本論の意図である。現在のアメリカでは多文化主義的状況だけではなく、それと反対に急激で大規模なエスニック間の融合のうねりが進行中であることをも強調したい。アメリカの人種・民族集団のあり方は多様であるから、3つの主要な集団、ヨーロッパ系白人、新移民、黒人に分類して検討してみよう。

2 ヨーロッパ系白人の場合

まずは、アメリカ人の4分の3を構成するヨーロッパ系白人の間で、状況はどのようなになっているのだろうか。ヨーロッパ系白人の状況も多様である。アーミッ

シュのように18世紀に渡来してきて、周囲とは全く区別される明確な集団として残っている場合もある。他方、植民地時代に渡来したスコッチ・アイリッシュやオランダ系、ユグノーなどは集団としてはもう消えてなくなった。ドイツ系も集団の結束性を失ってしまったといわれる。しかしここではもっと一般的な考察をしてみよう。

ヨーロッパ系は世代が経るにつれて変化してきた。第1世代はエスニック・ゲッターにまとまって住み、社会的・文化的諸組織の濃密な複合体を築くというのが一般的であった。英語も下手で、家では母国の言葉を話した。彼らはアメリカ市民権を取っても、内面は「外国人」だった。第2世代は子供のうちは家庭では親の言語で育つが、学校では英語を使い、熱心にアメリカ化しようと努力した。親のようになりたくないというのが彼らの願望であり、彼らは成長して家庭を築くと家庭でも英語を話した。真のハイフン付きの文化的多元主義の世界に生きたのは第二世代であったであろう。第3世代、すなわち移民の孫の世代は家庭でも英語で育った完全なアメリカ人である。しかし祖父母を通じて先祖の国について意識している。そして最早や完全なアメリカ人となっているので、むしろ自分の先祖の国に対する関心を深める余裕が出来てきた。「子供が忘れたものを孫が思い出す」というのがマーカス・ハンセンの法則といわれているものである。

ところが今では南・東ヨーロッパ系の「新移民」の子孫も、もう第4世代の時代に入っている。第4世代ともなると、祖父母もアメリカ生まれで、先祖の国のことを直接的に教わることはない。曾祖父母のことを直接に知っている人間は例外的存在であると言えよう。したがってスタインバーグという学者は、第4世代は「エスニックの歴史における分水嶺」だと主張している。文化的過去とのつながりはかなりの程度切れており、祖先の国の伝統は薄れざるをえないのである。

さらにアメリカ社会においてヨーロッパ系の「移民」、すなわち「外国生まれの者」は数的に減少してきたし、また彼らは歳をとった世代である。移民世代の減少、事実上の消滅はそれぞれ独自の文化とアイデンティティを保持しようと努力している集団にとっては回復できない損失である。

ヨーロッパ移民系の諸集団のアメリカ社会への同化は社会的地位の上昇によって促されてきた。アメリカ社会には移民系集団が最底辺（ただし黒人よりも上）に入ってきて、必死の努力の結果社会的地位を上昇させていくという構造、特に

新しい移民がつぎつぎに入ってきて、前にきた移民の地位は押し上げられていくという構造があり、これこそ「アメリカの夢」を支えた一つの構造であった。田口富久治氏は「アメリカ社会はエスニックな起源を異にする諸移民集団が、地球科学のいうプレート（岩板）のように、その社会の最下層に つぎつぎに潜り込み、次の移民集団がそのまた下に潜り込むことによって、社会的地位を上昇させていった多重的で動態的な移民社会である」と表現している。

そして上昇とともに同化、アメリカ化が進んできた。アメリカ化の重要な内容が祖国の言語の喪失であった。移民の孫の代になると祖先の言語をほとんど使わなくなっていたことが、様々な調査結果の示すところである。

エスニック集団に生じてくる変化については、私はユダヤ系の場合について色々調べてみた。アメリカにやってきた当時のユダヤ移民は「東欧ユダヤ人」であった。服装も、考え方も、行動様式もまさに東欧のユダヤ人がアメリカにやってきたのである。その彼らがアメリカ社会に適合しながら、「東欧系ユダヤ移民」の世界を樹立した。これが私の本で描いた世界である。第二世代には「アメリカ・ユダヤ人」という言葉が適しているであろう。しかし3世や4世については「ユダヤ系アメリカ人」という言葉を用いるのが相応しいと私は考えている。彼らは第一に「アメリカ人」なのであり、そのアメリカ人の中でユダヤを祖先とする点で独自の性格を持っているわけである。したがって20世紀初頭と今日とでは東欧系のユダヤ人の間には大きな変化が生じているのである。そしてこのことはヨーロッパ系の他の諸集団についても当てはまることなのである。

この間にエスニック・コミュニティのまとまりは非常に弱体化してしまった。今では彼らのコミュニティの経済的基盤は大部分失われており、圧倒的多数はそのコミュニティの外部で働くのであり、祖先の言語は勿論失われている。イディッシュ語はほぼ消滅した。今でも強くエスニックな結びつきが残存しているという人はある特定の地点だけを見たり、20世紀初頭のエスニック・コミュニティの強さを忘れていたのである。

ヨーロッパ系のなかでも北西ヨーロッパからの「旧移民」系統と南・東ヨーロッパからの「新移民」系統との相違が消滅しつつあることについてのリーバーソンとウォーターズの研究をはじめとして、エスニシティの変質、希薄化を示す様々な事象があるが、ここでは省略する。しかし省けないのはインターマリッジの増

大である。アメリカ人は自分と異なるエスニシティの異性とどんどんと結婚するようになった。1980年の国勢調査に基づく統計で、女性が（最初の結婚で）自分と同じエスニック集団と結婚している比率を挙げてみると次のようになる。イングリッシュ系56.1%、ドイツ系48.6%、ロシア系39.8%、アイルランド系39.5%、イタリア系39.5%など人口の多い集団では、同じエスニックと結婚する比率が高いが、それ以外の場合はノルウェー系22.0%、チェコ系17.7%、フランス系21.4%、スコットランド系21.2%、ポーランド系29.8%、オランダ系19.3%、スウェーデン系13.2%、ハンガリー系12.2%、デンマーク系9.0%、ウェールズ系6.9%といった具合である。この統計は老人をも含めた数値であり、若い年齢ほどインターマリッジの比率が高くなるのは当然である。例えば1980年イタリア系女性がイタリア系の男性と結婚している内婚率は39.5%だったが、しかし30歳以下の男性では28%にすぎなかった。ヨーロッパ系白人の場合には同じエスニックの異性と結婚するよりも、違うエスニック集団の者と結婚する方が多いのである。しかもこの傾向は宗教の壁を越えて進行している。プロテスタントとカトリック、ユダヤ人とキリスト教徒の婚姻が当たり前のことになっているのである。

そして1979年の国勢調査局の調査では総人口の46%がミクスト・アンセストリー、つまり異なるエスニック間の混血であった。勿論、混血しても父か母のいずれか一方の集団への所属意識を維持することがある。しかし全体的傾向としてはエスニック意識は希薄化せざるをえない。エスニック的に同質的な家庭こそエスニックな伝統の存続を保障するものであったが、異質な家族構成ではそれが困難にならざるをえないのである。

そして1980年の国勢調査で、自分の先祖についての質問に対して「アメリカン」と答えた者、「合衆国」と答えた者、「白人」とか「コーケイジャン」と答えた者の合計は1,200万人以上、また祖先を報告しなかった者が2,000万人おり、これを加えると総人口の14%は自分のエスニックな起源を知らないか、それについて明確な感覚を持っていない「ただのアメリカ白人」（“plain Americans”）であるということになる。つまり融合の結果、「アメリカ人」というエスニック的にみて全く新しい集団が形成されてきているのである。

したがってヨーロッパ系アメリカ人のエスニック意識は以前に比べて格段に希

薄なものになった。ポーランド系についてエドワード・カントーウィッツは「最初のポーランド系移民の孫、つまり第3世代は単にポーランド系統のアメリカ人になった」と述べ、またイタリア系についてはリチャード・アルバは「イタリア系アメリカ人は偶にリトル・イタリーを訪れた時とか、コロンブス・デーにだけエスニックになる。これはレジャータイム活動としてのエスニシティである」と述べている。こうしてアルバはエスニシティの黄昏 (twilight of ethnicity) という言葉を用いている。白人エスニシティを太陽に例えると、それは西の空に没しようとしている。西の空は夕日でまだ明るく輝いている。陽は暮れていないが、夜は近付いている。このような状況にヨーロッパ系白人はあるのではないだろうか。

アメリカのエスニック集団は生成、成長、衰退、消滅していく歴史的存在であり、それは出身国の民族を母体に、まずアメリカ生活に適応するためにアメリカで形成された。エスニック・コミュニティは移民とホスト社会との間を媒介し、メンバーのアメリカへの適応を援助した。それは人数の増加とともに社会的にも文化的にも力をつけ、全盛期となり、そして今衰退期に入っているというのが、ヨーロッパ系の場合なのである。

したがって一時騒がれたヨーロッパ系のエスニック・リヴァイヴァルの波はかなり収まってしまった。『エスニックの神話』という書物で非常に注目された学者、スティーヴン・スタインバーグはエスニック・リヴァイヴァルは19世紀～20世紀初頭の移民の大波に由来するエスニック集団の「死のあえぎ」(a dying gasp)であった、リヴァイヴァルはエスニシティの真実の再活性化を示すものではなく、むしろエスニック文化の萎縮、エスニック・コミュニティの衰退の症状であったと説明している。そしてスタインバーグは、過去1世紀の間にアメリカのエスニック集団の間におこった大きな変化を考えると、「メルティング・ポットが働いているのだ」という結論を避けることは出来ない」と言う。そして「確かに今エスニック料理は盛んである。しかしある広告はいふ。『ユダヤ人でなくてもレヴィーのパンを好きになれます』と。実にエスニック食品はエスニック多元主義を象徴するものではなく、メルティング・ポット自体を象徴するものになっているのだ」というのである。

色々な学者がアメリカにおける「メルティング・ポット」現象の進行を主張し

ている。西北欧系と南・東欧系を比較したリーパーソンとウォーターズは統計的調査の結果、次のように述べる。「メルティング・ポットが働いているのだといってよいのかも知れない。多様な集団がだんだんと同様に行動するようになるのに加えて、新しい人口が形成の途上にあるということかも知れない。」このような主張は古い考え方なのではない。文化的多元論を経過した後に、やはりメルティング・ポットが進行しているのだということが客観的調査に基づいて主張されているのである。

3 「新新移民」の場合

では「新新移民」の場合はどうであろうか。1965年に新しい移民法が制定されて以来大量に流入するようになったヒスパニック系およびアジア系の移民である。彼らの流入によってアジア系とヒスパニック系の人口が増加した。彼らはヨーロッパ系白人とは人種が違っている。アジア系に対する差別の問題が解決されているのでは決してない。しかしアジア系はよく「モデル・マイノリティ」と呼ばれており、家族所得などの平均もアメリカ人全体の平均よりもアジア系の方が高い。日系はその中でもさらに格段に高い。20世紀前半のアメリカで急速な社会的上昇を代表したのがユダヤ人だったとすれば、20世紀後半ではアジア系がその代表である。ただしアジア系の諸集団も多様であり、またアジア系諸集団の内部における両極化の傾向も著しい。しかし新新移民とアメリカ社会との関係は、一般にヒスパニックの場合の方が深刻であると言えよう。そこでここではヒスパニックの場合を中心に考察してみよう。

ヒスパニック系の増大、とりわけ非合法移民の流入が問題となり、多様な摩擦が生じ、ヒスパニックはアメリカ社会に同化できないのだという声が高まってきた。NAAWP (National Association for the Advancement of the White People) という団体がある。全国白人向上協会であり、いうまでもなく NAACP (National Association for the Advancement of the Colored People=全国黒人向上協会) をもじった名称である。その議長がかつて KKK に所属したことがあるデイヴィッド・デュークであり、彼は非ヨーロッパ系の移民は白人アメリカ文化の中に同化できないと考え、ヒスパニック移民は合衆国の南西部を奪取し、それをメキシコに取り戻すという秘密の国土回復運動に従事しているのであり、海

外に駐留しているアメリカの軍隊を呼び戻して非合法移民を逮捕するために使用せよと主張しているそうである。

しかしこの問題について学者たちはどう考えているのだろうか。1985年82名の著名な社会学者・人文科学者たち（人類学、経済学、歴史学、政治学、心理学、社会学）に対するアンケートでは、52%は近年の移民は以前の到来者と同じ程度に同化するだろうと考えていた。しかし学者の36%は近年の移民は以前の移民ほどには同化しつづかないと考えているという調査結果だったそうである。

状況は流動的である。ヒスパニックがアメリカ社会に同化していくのが容易な状況もあるし、同化を困難にする状況もある。まず第一に新移民が増えたといっても、まだ20世紀初頭よりも比率は少ないという事実には注意せねばならない。1910年には外国生まれは14.7%だった。1990年にはまだ9%である。第二に、ヒスパニックはスペイン語に固執し、英語を学ぼうとしないということがよく指摘されるけれども、実際にはそうではないようである。ランド・コーポレーションの調査では、米国生まれの第2世代は英語を流暢に話し、孫の世代は半数以上がスペイン語を全く断念している、第2世代の12%だけが英語を貧弱に話すということが報告されているし、またヒスパニックを専門的に研究している歴史家の庄司啓一氏によると、メキシコ系のスペイン語使用者は一世では84%であるが、二世では15%、そして三世では4%にすぎないということである。

第三に一般にヒスパニックは皮膚の色が黒人に比べて白人に近いという点でも比較的容易に白人社会に入りこむことができる。インターマリッジについていえば、1980年の統計で同じエスニック集団内で婚姻する比率はメキシコ系は76%、プエルトリコ人の場合は79%と比較的高いが、若い世代はもっと低いはずである。そしてチカーノの婚姻についてのある調査によると、ロサンゼルスにおけるチカーノと非チカーノとの婚姻の比率は1世代前のニューヨーク州バッファロにおけるイタリア系やポーランド系の場合にはほぼ等しかったというのである。

したがってヒスパニックについて考える際には、外国生まれとアメリカ生まれとは区別して考える必要があるのである。1984年テキサスのチカーノについての調査では、40%は非合法労働者はこの国にとって有害であると答えたとし、また1992年メキシコ系、プエルトリコ系、キューバ系のアメリカ人についての調査では、65%は「この国には移民が多すぎる」ことに同意したという。つまり彼

らは「アメリカ人」になってしまっているのだといえよう。

新移民がかつての「新移民」に類似しているということは、私が特に感じていることである。東・南ヨーロッパ系移民が大流入したところのエスニック・スラムの状況について私はかなり調べてみたことがある。そして例えば高賛侑氏の『アメリカ・コリアタウン』という本で今日の韓国系地区の描写を読むと、私は20世紀初頭のニューヨークのローワーイーストサイドと似ていると感ずるのである。新しい移民というものはエスニックの居住地区に密集して居住し、母国の言葉を話すものなのである。ヨーロッパ系の場合もヒスパニック系の場合もこの点では変わらないのではなかろうか。そしてヒスパニックも第2世代、第3世代になっていって、文化変容していくと考えるべきであろう。「新移民」を白人だった「新移民」とは全く違うのだと考えるのは人種主義的発想だというように思われるのである。

しかし今日の有色マイノリティ移民集団には以前の南・東ヨーロッパ系の場合とは異なる側面が色々あることも否定できない。まず第一に立ちふさがるのが人種の壁である。この点は何といっても極めて重い事実である。第二には連邦政府がエスニック集団の存在を公式に認知して、二言語教育と「アフーマティヴ・アクション」が実施されているという事実がある。第三に今、大量の移民流入が継続しており、故国から濃厚なエスニック文化が生のまま導入され続けていることに注目せねばならない。そしてヒスパニックの場合、民族集団は異なっても共通のスペイン語使用により人口が膨大であり、ヒスパニック地区ではスペイン語で生活し続けることがかなり出来るという状況がある。さらにメキシコ系の場合には国境に隣接しており、もともとメキシコ領だった地域に彼らは移住してくるのであるから、メキシコ人居住領域の拡大という性格を持っており、故郷との間を頻繁に往復し、アメリカ社会に溶け込む気持ちが薄いという問題がある。

また今日の移民について特に考えるべき重要なことは、以前と異なり、「アメリカの夢」を実現可能とした社会的上昇のメカニズムが変化してしまったということである。以前には移民や第2世代が産業労働者という階級の内部で次第に高賃金の職に上昇していく機会があったのに対して、現代におけるアメリカの経済的停滞、経済構造の変質、特に産業の「空洞化」によって中間的職種が縮小し、

「砂時計経済」(hour-glass economy) などと言われて、産業内の地位の上昇を通じてアメリカ化が進行するというプロセスが以前のようには期待できないという状況が生じているのである。今日の移民が置かれた位置は、アメリカが世界最大の工業国家へとどんどんと成長していった時代の移民とは違うのである。ただアジアから増大してきた高学歴移民がアメリカ経済において占める位置を含めて、この問題は詳細な分析をしてみなければならない。

ところで移民のアメリカ化に関連して、越智道雄氏の多文化主義の説明の仕方は非常に奥深いものがある。氏によれば多文化主義とは「各民族集団の母語と母体文化という保護膜で移民を庇護しつつ、徐々に社会主流化を遂げさせていく」という立場であり、そのことが「社会主流化によって完全に主流社会に取り込まれてしまわないだけのアイデンティティを保障する。同時に母語と母体文化の群れは主流文化の支配を相対化し、多民族社会らしい多様性をその国の文化に付与できる。」そして「ただ移民の母体文化保持と社会主流化とは正反対の活動であり、2つの相反する機能の均衡を維持することはむづかしい」というのである。これが多文化主義の狭義の「定義」として相応しいかどうかの問題はあるが、移民がアメリカ社会に流入してアメリカ人になっていく過程の説明としては極めて適確であるように思われるのである。

4 黒人の場合

さて最後に黒人(アフリカン・アメリカン)の場合について考えてみよう。多文化主義を最も激しく主張しているのは黒人の場合であろう。ただこの場合には「多文化主義」を通り越して、自民族(人種)が他の人種・民族集団よりも優秀であると唱えたり、他の人種と交じり合わないといった自民族中心主義(エスノセントリズム)の主張も出てきている。このような立場は「多文化主義」をも逸脱しているのではなかろうか。なぜなら多文化主義とは自己の文化の主張のみならず、他者の文化に対する寛容な理解をも主張する立場であるからである。

黒人革命の端緒となった1954年の「ブラウン判決」で連邦最高裁は、白人と黒人の学童が別々の学校で学ぶのは不平等であると判決し、これが黒人革命の発端となったのであり、公民権運動は「隔離による差別」、いわゆるセグレーションの撤廃を求めたのだった。ところが今では黒人の側から、人種統合を否定し、

白人の主流の文化を拒否し、黒人と白人とは異なる文化をもち、分離すべきであり、共通の文化は不可能だと主張する場合があるのである。「白と黒との分離を復活せよ」という要求が黒人の側から唱えられるのである。白と黒の生徒が一緒に白人の教師から教えられたら黒人生徒が劣等感をもつようになるといった主張がなされる。こうして人種統合を否定し、黒人と白人とは異なる文化をもち、共通の文化は不可能なのだといった主張がなされたりするのである。

このような黒人分離主義は特に教育カリキュラムに影響を及ぼしており、古代エジプトは黒人社会であり、科学や哲学の源泉はエジプトにあった、そしてベートーベンのようなヨーロッパの偉大な芸術家も実は「アフリカ系ヨーロッパ人」なのであり、ヨーロッパはアフリカから文明を盗んだのだといった教育さえ行なわれているという。黒人がその誇りを取り戻すためとはいえ、歴史学的に間違っていたことが教えられているのは重大な問題であると、アーサー・M・シュレジンガーなどは大変に心を痛めていることは、彼の『アメリカの分裂』によく表明されている。

黒人が抱えている問題は非常に深刻である。それは奴隷制度というアメリカの歴史の遺産である。近代の奴隷制度は黒人奴隷制度であり、人種奴隷制度だった。この人種主義こそアメリカが抱える原罪である。ネイサン・グレイザーはこれまでの同化をめぐる議論を歴史的に検討した結果、クレヴクール以来、同化をめぐる議論はヨーロッパ系白人に焦点が置かれ、黒人は無視されてきたことを明らかにした。文化的多元論の祖ともいえるホーレス・カレンにも黒人についての言及がほとんどない。20世紀初頭に移民の「同化」をめぐる盛んな議論が展開された時、南北戦争、奴隷制廃止論、南部再建をめぐる議論はすっかり忘れられ、「新移民」についての議論ばかりがなされており、黒人とインディアンは同化をめぐる議論の対象外に置かれていたというのである。

もっとも黒人のことが忘れられていたのではない。同化論の古典的理論家であったロバート・パークは次のように述べていた。「アメリカのような広大で多様でコスモポリタンな社会においては、同化に対する主要な障害は文化的相違ではなく、肉体的特徴であるように思われる。黒人はこの国に300年間いながら同化していない。これは黒人がアメリカにおいて外国的な文化と外来的伝統を保持しているからではない。……彼らを人口の他の人々から区別するところのものは……

肉体的で人種的な特徴に基づいているのである。」

黒人の特殊性には皮膚の色の問題があるのである。黒人の地位が上昇しても、一流大学の教授になっても、事ある毎に自分の皮膚の色を気にせざるを得ないというのがアメリカ生活の現実である。そして黒人はインターマリッジ率が極端に低いこととか、公民権法以来 30 年たち、所得や地位の上昇はあっても、彼らの社会的分離（アパートネス）は真実のものである。キング牧師の時代には黒人の理想は同化であった。ところが黒人に対する主流社会の偏見が強かったために、同化の理想は不評を買うようになったのだと 그레이ザー は指摘する。黒人の大部分は黒人地区に住んでいるというような人種の住みわけ現象が現実なのであり、このような黒人生活の現実が同化のイデオロギーに対する全面的な反撃を養ったのである。

しかし皮膚の色の問題は単なる物理的色彩の問題ではなく、社会的・歴史的な問題である。1996 年 11 月に天理大学のアメリカス学会大会で私が「南北アメリカ大陸の近代——人種関係の相違を中心として」と題して話したことであるが、アメリカ合衆国とラテンアメリカの人種関係は非常に対照的である。ラテンアメリカは人間関係の不平等を原理とする縦型のヒエラルヒー社会であり、そうであるがゆえに、多様な人種が上下関係で連続的に配置され、混血が進み、真の意味で人種の「メルティング・ポット」となっていった。これに対してアメリカ合衆国は、ヨーロッパ系白人がプロレタリア化を逃れるための「自由な植民地」として出発し、彼ら自身が働く農業定住地として出発した。このため西部への膨張＝西漸運動＝インディアンからの土地の奪取、リザーベーションへの閉じこめが生じた。また賃金労働者が不足するという「自由な植民地」の条件のために、他地域からの不自由労働力を連れてこなければ雇用労働力が獲得し難く、黒人奴隷制度が生まれることになった。こうしてインディアンのリザーベーションへの閉じこめ、黒人奴隷制度が社会の根幹の装置として生まれ、「隔離」に基づく人種主義が全面的に貫徹した。こうしてアメリカはインディアンと黒人を市民社会から排除し、白人のみの世界となり、ヨーロッパの延長となり、西ヨーロッパ以上に超近代的な市民社会となり、近代の普遍的原理を表明する、世界に燦然と輝く自由と平等の国となった。こうして白人にとっての自由と平等の国に隔離に基づく人種差別主義が全面的に貫徹したのである。これがアメリカ史を貫徹する最

大の歴史的皮肉である。したがってアメリカ史の基本構造に組み込まれた人種の壁を越えることは容易なことではないのである。その克服にはすごいエネルギーと結束力が必要である。これが黒人の強烈な自己主張の背後にあるのだと考えることが出来よう。

しかし黒人は黒人としての結束を今後も長く強烈に保っていただけるのだろうか。そしてアメリカは集団を単位とする社会になってしまうのだろうか。私は疑問に思う。今日の黒人の間では著しい二極化が進行中である。一方では黒人の間における中産階級の台頭は著しく、全般的に彼らの状態は著しく改善された。1990年の黒人の所得分布は年収2万5,000ドル以上の中産階級以上が46.9%を占めた。差別問題の改善も著しいものがある。上坂昇氏は黒人の世論調査で、差別を受けたという黒人36%、受けたことがないという黒人63%という数字を紹介している。多くの黒人がアフーマティヴ・アクションの成果を利用して教育を受け、社会的地位を上昇させ、郊外に向かって劣悪なインナーシティのブラック・ゲッターを脱出した。

黒人の政治進出も著しく、1992年の連邦議会選挙で40人の黒人議員が当選した。黒人人口の比率12%には及ばないが、下院での黒人議員比率は9%であった。地方政治にも黒人が著しい進出をしている。選挙権を獲得した黒人が黒人政治家に投票するということによって、まずは黒人政治家の増大が生じた。しかし今日では白人からも支持される黒人政治家たちが出てきた。例えば1989年にヴァージニア州知事に黒人のダグラス・ワイルダーが当選したが、ヴァージニア州では黒人有権者は20%にすぎないのである。彼の当選は脱人種政治の到来を象徴するものとして捉えられたのである。

以前にも黒人中産階級が存在した。しかし彼らは黒人大衆を相手にして経済生活を行っていた。しかし今日の黒人中産階級の経済活動は多くが全国経済の中に位置する活動であり、黒人のホワイトカラーや専門職業者は白人が多い職場で過ごし、白人と競争するようになった。このことは彼らにいやでも黒人であるということ意識させることになる。また彼らが上昇すればするほど「ガラスの天井」にぶつかり、いらだちが高まるという状況が存在する。これが彼らの黒人としての意識を高める一つの要因となっていると考えられる。しかし「ガラスの天井」は様々な白人エスニックも経験してきたことであり、黒人だけの問題ではな

い。また今日の黒人中産階級の大部分が第1世代である。黒人中産階級が二代目、三代目になる時代には異なる状況が訪れるのではなかろうか。

他方、黒人中産階級の脱出によって都市中心部の黒人地区のゲッター化はさらに進行し、アンダークラスの状況が深刻化したことはよく知られている。こうして黒人は持てる者と持たざる者とに分極化したのである。

これには勿論アメリカの経済構造の変質の問題が関連している。産業の空洞化、そして黒人中産階級のスラムからの脱出によって、スラムに残された者たちのアンダークラス化は深刻になった。黒人貧困層は上昇することを期待出来ない状況に置かれている。黒人の出産の64%が未婚の母によるものであるとか、殺人の逮捕者の55%が黒人、囚人の45%が黒人であるというような悲惨な数字はいくらでも挙げることが出来るのである。経済的に上昇することが期待できない黒人貧困層が多数おり、絶望が深まれば深まるほど白人との統合を拒否し、分離の方向に進もうとする。こうして黒人中産階級の間にも、アンダークラスの間にも、エスノセントリズムが高まることになる。マルコムXブームにはこのような状況が反映されていると言えよう。

しかし黒人の貧困の問題は人種の問題というより、階級の問題である。著名な黒人の社会学者ウィリアム・J・ウィルソンは、黒人の社会的上昇を規定する主要な要因はすでに人種ではなく、教育程度や経済的要因であり、この意味では階級こそ重要であり、雇用、職業訓練、医療保険、教育改革、犯罪・麻薬対策を優先すべきだと主張している。彼の一つの著書の題名、『人種の意義の低下』(The Declining Significance of Race) にそれが現われている。アメリカにおける人種差別問題の解決には、単なる人種差別意識の克服ではなく、社会経済制度の徹底的な変革が必要なのである。この点では大塚秀之氏の研究などが重要な解釈を展開している。

ここで日本におけるアメリカ黒人問題についての専門的研究者の意見を少し紹介しておこう。上坂昇氏は1990年のある調査結果では「アフリカン・アメリカン」と呼ばれたい黒人は15%にすぎず、72%は従来どおり「ブラック」と呼ばれたいと述べたという事実を紹介し、「分離主義は一部の黒人の心情を代弁していることは否定出来ないが、黒人運動の主流の考えになるとは想像しにくい」と言われる。政治学者の松岡泰氏も、「政治運動や学界における黒人中心主義の台

頭から、すぐさま『アメリカの分裂』を連想するとすれば、少し飛躍があるように思われる。」「マルコムXがブラック・ナショナリズムを唱えた1960年代には、黒人は全体として社会の最下層、いわばアウト・カーストだったので、その運動は社会を分断しかねない危険な側面を持っていた。それに対して1980年代にはこの運動の中心的な担い手は高学歴・高所得の中産階級に変化していたし、黒人はすでに政府に対して影響力を行使できる圧力集団の1つとなっていた。つまり1990年代のブラック・ナショナリズム登場の背景には黒人の体制内統合があり、分裂と統合が同時に進行した」からであると述べている。

さらに松岡氏は黒人の分極化が進むなかで、「日本語の『黒人問題』という表現も近い将来死語になるであろう」と言う。この言い方は非常に大胆なものであるが、かなり説得力を持っているように思われる。以前のアメリカでは「ニグロ・プロブレム」という言葉が用いられた。しかし今日のアメリカの研究文献で「アフリカン・アメリカン・プロブレム」という言葉を見かけることはないのではなかろうか。松岡氏は「それに代わって例えばアンダークラス問題は教育制度や都市の問題として、あるいは階級問題として、今後議論されることになるであろう」と続けている。

5 最後に

最後にこれから考えて置かねばならないことを2点ほど指摘しておこう。一つはアメリカ社会は多民族社会から多人種社会へと変質し、暫らくそれが継続するだろうということである。ヨーロッパ系白人の間で融合が顕著に進行しており、また多様なヒスパニックの間にラティーノ意識が見られる一方、黒人の地位の向上と自己主張、そして非白人の新移民の大流入が今後暫らくは継続するだろうからである。

第二にメルティング・ポット論が復活しようとしていることに注目すべきである。ヨーロッパ系白人の間に生じたことを考えねばならない。ここでエドワード・カントーウィッツの文章を紹介しておこう。彼は『アメリカ社会史百科事典』(1993)の「エスニシティ」の項目を担当し、次のように述べている。「過去1世紀以上にわたってアメリカのエスニック集団の間に起こってきた重大な諸変化——母語、そして移民文化の他の大部分の核要素の喪失、移民コミュニティの拡

散、幾世代にもわたるかなりの経済的・職業的モビリティ、エスニックな文化の浸食と萎縮、エスニシティを支えた宗教の衰退、多様なエスニック・サブサイエティの文化的収斂、エスニック的・宗教的インターマリッジの加速化——を考える時、我々が幾世代にもわたって目撃しつつあったところのものはメルティング・ポットの作用であるという結論を避けることは困難である。」

そしてカントーウィッツは歴史的に誤解されていたメルティング・ポット論を見なおすことを提唱する。「メルティング・ポットの観念は近年非常に歪められ誤解されてきたので、その主要な特徴を強調することが必要である。第一に、それは2方向のプロセスである。移民とアメリカ人の両方がつぼの中に投げ込まれるのであり、両者が彼らの特徴の若干を放棄し、新しい特徴を獲得するのである。」つまりメルティング・ポットの中で移民だけが溶けるのではないのである。移民が祖先の民族的文化を捨ててアングロサクソン中心のアメリカに溶けていくのは、メルティング・ポットなのではない。それはアングロコンフォーミティである。メルティング・ポット論ではアングロサクソンを含めてアメリカに古くからの北西ヨーロッパ系の白人も新しく到来する移民に融合していくのである。それは本来、アングロコンフォーミティとは決定的に違う概念なのである。こうして到来する移民はアメリカ社会を変えてきたのである。ただし20世紀においてメルティング・ポットの名の下に現実に行進したのが「アングロコンフォーミティ」だったために、誤解が生じたのである。カントーウィッツはさらに次のように続ける。「第二にそれは未来志向的なプロセスである。理想的なアメリカ人のタイプは未来にあるのであり、誰もそれがどのようなものになるだろうかを正確には知らない。最後にそれは希望にみちた寛大なイデオロギーである。それは強制的でも抑圧的でもない」。

ここでグレイザーとモイニハンの記念碑的な著作『人種のつぼを越えて』についても再考察することが必要になる。この本の中にある「るつぼについてのポイントはそれが起こらなかったということである」という文章が文脈を離れて引用されることになり、文化的多元論の論拠にされた。しかし2人の著者はもっと慎重だったのである。この本の結論部分を読みなおす必要があろう。「われわれはエスニシティのパターンがいかに深く市の生活に刻まれているかを示そうとした。これは個々の集団がどれも消滅しないだろうというのではない。逆に消滅は

繰り返し起こっている現象である。ドイツ系の消滅は特に著しい例である。一集団としてのドイツ系は消えてしまっている。」2人の結論はこうである。「アメリカ国民はまだ形成の途上にある。その過程は神秘的であり、もし最終的な形態があるとしても、その最終的な形態はまだ知られていない。」

最後にアメリカのエスニック問題を考える際に階級の問題を忘れてはならないことを強調しておこう。そこでアーヴィング・ハウの論文の一節を孫引きだが引用してみよう。「我々の社会の中心的諸問題は、エスニックな集団にではなく、経済政策、社会的ルール、階級関係と関連を持っている。それらは富の巨大な不平等、増大するサブプロレタリア階級の恥ずべき無視、政策立案者たちによる高いレベルの失業の許容と関係を持っている。このような種類と規模の問題に対してエスニシティはどんな解決策を提供できるというのか。非常に弱い答えでしかないのではなかろうか。」

エスニシティの強調は恵まれざる集団のメンバーに対して確かに「セルフ・エスティーム」を提供することは出来るであろう。しかし階級や経済構造の問題がエスニックの問題と絡んでいることが認識されねばならない。このような理解が日本では大塚秀之氏や庄司啓一氏、そして私などの立場である。この絡み合いの関係を明らかにしていくことが重要なのである。アメリカの恵まれざる人種・民族がその区別線を越えて連帯することこそ大切なのである。このことがキング牧師が最後にたどりついた考え方であった。彼は述べた。「ブラック・パワーというスローガンよりも、貧者のためのパワーの方がはるかに適切であろう。黒人が抱えている諸問題は、アメリカ社会の全体がより大きな経済的正義の実現に向かって方向転換しないかぎり解決不可能なのである。」恵まれざる者同士が人種・民族集団の違いのゆえにいがみあってきたのが、アメリカの歴史であった。その結果を利用してきたのが、アメリカの支配層であり、保守層であった。このことを考える時、ロナルド・タカキの論文の副題が意味深長である。それは“Multiculturalism: Battleground or Meeting Ground?” というのである。多文化主義は自民族中心主義（エスノセントリズム）であってはならないのである。

●参考文献

- 明石紀雄・飯野正子・田中真砂子『エスニック・アメリカ——多民族国家における同化の現実』（有斐閣、1984）
- 有賀貞編『エスニック状況の現在』（日本国際問題研究所、1995）所収の越智道雄氏、庄司啓一氏、上坂昇氏の論文
- 梅棹忠夫監修『世界民族問題事典』（平凡社、1995）
- 大塚秀之『現代アメリカ合衆国論』（兵庫県部落問題研究所、1992）
- 越智道雄『エスニック・アメリカ』（明石書店、1996）
- 高賛侑『アメリカ・コリアタウン』（社会評論社、1993）
- 田口富久治『民族の政治学』（法律文化社、1996）
- 野村達朗『「民族」で読むアメリカ』（講談社現代新書、1992）
- 野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク』（山川出版社、1995）
- 本間長世『多民族社会アメリカのゆくえ』（岩波ブックレット、270号、1992）
- 松岡泰「アメリカ社会の変化と黒人問題の変容」 五十嵐武士他編『アメリカの社会と政治』（有斐閣、1995）
- ネイサン・グレイザー、ダニエル・モイニハン（阿部齊・飯野正子訳）『人種のるつぼを越えて』（南雲堂、1986）
- A・M・シュレジンガー『アメリカの分裂』（岩波書店、1992）
- ロナルド・タカキ（富田虎男監訳）『多文化社会アメリカの歴史』（明石書店、1995）
- Alba, Richard. *Italian Americans; Into the Twilight of Ethnicity* (1985)
- Kantowitz, Edward. "Ethnicity," *Encyclopedia of American Social History*, eds., Mary K. Cayton, Elliott J. Gorn, and Peter W. Williams, Vol.1 (1993)
- Lieberson, Stanley, and Mary C. Waters, *From Many Strands; Ethnic and Racial Groups in Contemporary America* (1988)
- Park, Robert. "Assimilation," *Encyclopedia of Social Science* (1930)
- Steinberg, Stephen. *The Ethnic Myth: Race, Ethnicity, and Class in America* (1981)
- Wilson, William J. *The Declining Significance of Race* (1978)
- Howe, Irving. "The Limits of Ethnicity," *New Republic*, June 25, 1977. quoted in *ibid.*
- Annals of the American Academy of Political and Social Science*. Vol.530 (November 1993): Pete I. Rose, ed., "Interminority Affairs in the U.S.:

Pluralism at the Crossroads”

Rita J. Simon, “Old Minorities, New Immigrants; Aspirations, Hopes, and Fears”

Alejandro Portes and Min Zhou, “A New Second Generation: Segmented Assimilation and Its Variants”

Ronald Takaki, “Multiculturalism: Battleground or Meeting Ground?”

Lawrence Fuchs, “An Agenda for Tomorrow: Immigration Policy and Ethnic Policies”

Peter Rose, “‘Of Every Hue and Caste’: Race, Immigration, and Perceptions of Pluralism”

Nathan Glazer, “Is Assimilation Dead?”